

## 序

VAN（付加価値通信網）とか VE（価値工学）などといった価値にかかわる言葉は、日常よく目に触れ、耳にする所である。しかしその字義は分かっても、価値の意味内容を同一には解釈し難い。また、一般に価値を求めることに異存はなくても、何に価値を認めるかは人によって意見が分かれ、一義的に価値は定め難いことが多い。今後、価値の多様化と言われる社会動向から、恐らく凡ゆる分野で新しい価値を求めようとする動きが活発になるものと思われる。

例えば企業では、もともとその基本的目的を価値の創造におくという考え方があり、どのような価値を提案し得るかが、これからの企業の死命に影響を与えることになる。一方、科学・技術の世界では以前から「科学は真理を探究し、技術は価値の発見に目的がある」などと言われていたが近年、Wertfrei（価値に対して自由）とされた科学にも倫理性が問われるようになり、価値と無関係ではあり得なくなっている。

こうして改めて価値の所在を探て行くと、経済学で言う交換価値などの見方もあるが、結局は社会生活さらに人間の生命といった根源的な問題に遡り、個人の世界観といったものに帰着する。このような本質的価値の一つに宗教的価値があり、それが個人を越えて伝達されることによって生ずる現象に宗教的価値体と言われるものがある。ある宗教学者はこの価値体を帶価性、蓄価性、創価性の三つに分類している。帶価性とは個人的な宗教的価値の裏付けによって路傍の石のような単なる素材が一時的に宗教的価値を帯びるものを言い、蓄価性とは偶像や儀礼のようにそれに接触した個人に宗教的感情を誘発するものを言う。そして、創価性とは宗教的価値の源泉となる個人、あるいは集団といったものを言うのだそうである。この分類は価値の多様化の時代にあつて、象徴的な示唆に富むように思う。

VE では機能と原価の比で価値を表わすが、価値の発見、創造を目指して技術の研究が行なわれるとすれば、価値の評価尺度さらに社会、企業にとって技術がどのような価値体として意味をもつか、より真剣に問い直してみる必要があるそうである。

1984年10月

清水建設株式会社技術研究所長

工学博士 太田利彦